

## 「いゝろ」の叙法

矢 本 浩 司

## はじめに

本稿では、特定の「物語内容」に基づく小説群の構造的な反復を確認し、「回想の叙法」(後述)の定型性を抽出する。同時に、それらの小説間の構造的な差異を明らかにし、各小説の文学的個性を浮き彫りにする。その上で、夏目漱石の「いゝろ」の解釈に一石を投じたい。

例えば、伊藤左千夫の「野菊の墓」では、一人称の語り手の政夫が、語りの現在から「もう十年余も過去った昔のこと」という過去に起こった出来事や思いを振り返って物語る。「野菊の墓」は語りの現在から始まり、過去を回想し、最後に現在に戻る(現在―過去―現在)という入れ子式の構造を持つ小説である。回想される物語内容は、一五歳の政夫と一七歳の民子が相思相愛であったのに、政夫が千葉の学校へ行っている間に民子は嫁がせられ、流産が原因で死ぬというものである。小説の最後で語りは

現在へ戻り、政夫は「民子は余儀なき結婚をして遂に世を去り」、「僕は余儀なき結婚をして長らえている」と述べ、「僕の心は一日も民子の上を去らぬ」と結ばれる。「野菊の墓」に見られるような、一人称の語り手が語りの現在から過去を振り返って語る叙法を、本稿では便宜的に「回想の叙法」と名付けておく。

## 一

回想の叙法を採用する小説では、一人称の語り手に対応する聞き手が想定される。「野菊の墓」のモデル小説として指摘のあるイワン・ツルゲーネフの「初恋」で言えば、手帳に記された内容を語るヴラデーミル・ペトロヴィッチが一人称の語り手である。これに対して、ヴラデーミルが手帳に記した過去の物語には登場しないが、手帳を捲るヴラデーミルの語りに耳を傾ける部屋的主人とセルゲイ・ニコライイチという二人の友人が聞き手である。ツルゲーネフの「初恋」の語りの現在は、三人称の語り手

によって語られ、回想される過去（手帳に記された物語）は、ヴラデーミルによる一人称で語られる入れ子式の構造になっている。厳密に言えば、この場合は、物語を覆う三人称の語り手が第一の語り手であり、（物語の大部分を占める）手記の内容を語る（回想する）ヴラデーミルは第二の語り手である。ヴラデーミルの話を聞く二人の友人も、厳密には第二の聞き手であり、物語世界には明示されないが、第一の語り手である三人称の語り手の話を聞く第一の聞き手も仮定できる。もちろん物語の登場人物と考えられる語り手は小説の作者とイコールではないし、同じく聞き手も読者とイコールではない。

「野菊の墓」の語り手は、一貫して一人称の政夫であるが、もちろん作者である伊藤左千夫と政夫は同一人物ではない。語り手に対する聞き手は、「野菊の墓」の物語世界では明示されないが、言わば隠れた登場人物である。政夫が回想する過去において、民子は政夫からの手紙を握ったまま亡くなるが、この手紙の書き手は、第二の語り手としての政夫であり、第二の聞き手は、手紙の受け手である民子ということになる（ただし、政夫が手渡した手紙の内容は詳述されない）。ツルゲーネフの「初恋」でも、作中でヴラデーミルの父に手紙が届き、その手紙を読んだ父は狼狽する。第二の語り手であるヴラデーミルは、この手紙の送り主がヒロインのジナイダであると推測しているが、手紙の文面が作中で公開されていれば、第三の語り手がジナイダであり、第三の

聞き手がヴラデーミルの父ということになる。<sup>(年)</sup>

「野菊の墓」とツルゲーネフの「はつ恋」と嵯峨の屋おむろの「初恋」の三作を比較し、「野菊の墓」がロシア文学を志向したとする論文<sup>(注8)</sup>がある。確かにこの三作には類似点があるが、本稿では、とりわけ三作とも回想の叙法を採用している点に注目して、その共通点と相違点を再確認してみたい。

三作ともに回想の叙法が採られていて、少年が自分より年上の少女に恋をする。「野菊の墓」の政夫と民子は山へ綿を取りに行き二人きりになるが、嵯峨の屋の「初恋」の秀とお雪は森に蕨を取りに行き二人きりになる。少女たちは出産後もしくは流産後に亡くなる。異なる点として目立つのは、嵯峨の屋の「初恋」では、お雪は秀に特別な感情を持っていないのに対し、「野菊の墓」の政夫と民子は相思相愛だったことである。

ツルゲーネフの「はつ恋」も、「野菊の墓」及び嵯峨の屋の「初恋」と良く似ており、やはり回想の叙法を採用している。少年ヴラデーミルが年上の少女ジナイダに好意を抱く。時を経てジナイダは他の男と結婚し、やがて亡くなる。この三作の物語は、概ね同じように進行していく。「野菊の墓」や嵯峨の屋の「はつ恋」と異なり、ツルゲーネフの「初恋」で際立つのは、同世代の男たちを翻弄する女王として君臨するジナイダが、語り手ヴラデーミルの父と不倫関係にあったことだろう。ヴラデーミルに恋愛感情を持たないどころか、ヴラデーミルの父に好意を抱

いて関係を持ったジナイダ、秀に対して特別な感情を持たなかっただけのお雪、一途に政夫を好いていた民子。三つの物語の女性像は、三者三様である。

このように粗筋を追うと、これら三作の小説には、それぞれに酷似した点が多くある一方で、男女の関係のあり方、特に女性像が大きく異なることがわかる。この相違点にこそ各作品の文学的個性があるのだが、ここでひとまず押さえておきたいのは、語り手の男が時を経て回想する物語内容は、いずれも、かつて好意を抱いた女に関係しているという点である。

三つの小説はいずれも回想の叙法を採用しているのだから、語り手は、回想できる程度に過去の出来事（の衝撃）から距離をとることができている可能性が大きい。あるいは、過去を回想して語るという行為自体が、出来事や事件を受け止め、整理・精算し、評価しようとする試みである可能性もある。ツルゲーネフの「初恋」の第一の語り手であるヴラヂーミルは、友人たちに初恋をその場で語るように要請されたのに、一度帰って、初恋に関する事柄を手帳に記述し、別日に友人たちに語って聞かせたのだから、一連の事件（初恋の相手への思い、初恋の相手の性格、初恋の相手と自分の父との不倫、初恋の相手と父の死など）についての整理・精算が、少なくとも手帳に客観的に記述できるほどに完了した地点に立っているはずである。もし未だに起こった出来事が受け止めきれず、混乱や動揺の渦中に立ちすくんでいたとした

ら、冷静で詳細な順序だった手記などは到底書けまい。嵯峨の屋の「初恋」の秀にしても、五〇年もの長い歳月を経て初恋を回想しているのだから、初恋の相手の死を思い出として語る（「無常を噛み締める」）程度には、気持ちの精算は済んでいるはずである。「野菊の墓」の政夫にとっても事態は同じで、思い出せば今でも涙が出るなどと言ってはいるが、最後には「余儀なき結婚をさせられて」云々と、過去の出来事にコメントを付すほどには整理がついている。斎藤美奈子は、「野菊の墓」の結末部について「一日も民子の上を去らぬ」なんて……本気のわけないじゃん」と言及しているが、達観した地点に語り手の政夫が立っている可能性は高いだろう。かつて少年であった頃に年上の女に恋をした語り手たちは、時を経て、過去の出来事を相対化できる地点まで達しているわけである。

## 二

「野菊の墓」、嵯峨の屋の「はつ恋」、ツルゲーネフの「初恋」という三つの小説は、ごく簡単に要約すると、「少年が年上の女を好きになり、やがてその女が死ぬ」話である。また、「野菊の墓」と嵯峨の屋の「はつ恋」では、ヒロインの妊娠や出産がヒロインの不幸（死）に大きく関係している。ツルゲーネフの「初恋」では、妊娠の事実は明示されてはいないが、ヴラヂーミルの父が脳溢血で倒れて亡くなる直前に、父宛に手紙が届く。その手

紙を読んだ父は涙を流すほどに狼狽して、グラヂーミルの母に頼み事をし、ほどなく死亡する。父が死ぬと、グラヂーミルの母は、モスクワへまとまった額を送金している。回想するグラヂーミルは、手紙の送り主はジナイーダであろうと推測しているが、病床の父が母に頼んでモスクワにいるジナイーダへ送った金は、妊娠の報告に対する中絶のための費用ではないだろうか。淡々と回想するグラヂーミルは、送金の理由に触れないが、グラヂーミルの気高い父が、手切れ金の名目で送金するくらいで涙を流しはしまい。グラヂーミルは、父の涙があまりに意外で驚いているほどだから、父が涙する余程のことがジナイーダからの手紙に記されていたはずである。となれば、幼いジナイーダがグラヂーミルの父の子を宿したという報告か、あるいは、中絶や死産などの報告であった可能性がある。そうであれば、「野菊の墓」も嵯峨の屋の「はつ恋」もツルゲーネフの「初恋」も、ヒロインには妊娠による不幸が共通することになる。妊娠が直接健康に影響したわけではないとしても、時を経て、ジナイーダも不遇のうちに亡くなるのだから、三作品は、「少年が年上の女を好きになり、やがて（その女が他の男との間で妊娠し）、不幸の後に死ぬ」と補足して要約し直すことができる。

同じように要約できる小説として、レーモン・ラディゲの「肉体の悪魔」が脳裏に浮かぶ。この小説では、第一次世界大戦の最中、一五歳の学生「僕」が一九歳の美しい人妻マルトと恋に落ち

る。マルトの夫ジャック（最初は婚約者）は出征中で、マルトのジャックへの愛は既に冷めていている。やがてマルトは妊娠し、出産後に亡くなるという話である。この小説も、やはり一人称の語り手である「僕」が四年前を回想する形が採られている。「野菊の墓」に比べれば、圧倒的に早熟で大胆な若者たちが登場するが、年上の女性が妊娠後に死ぬという物語の展開は、「野菊の墓」と変わらない。

現代日本に目を向ければ、このことは、ミリオンセラーとなり、映画化もされた村上美佳の「天使の卵 エンジエルス・エッグ」にも当てはまる。一人称の語り手である一九歳の美大志望予備校生である歩太と、彼より八歳年上の精神科医で未亡人の五堂春妃とが恋愛関係に陥る。歩太の前の彼女である夏妃は、歩太への思いが立ちきれず、そのことを姉に相談していたが、その姉が春妃であった。事後的に三者は自分たちの置かれている関係を知る。やがて春妃は妊娠するが、医療ミス（薬物アレルギー）によって死亡する。時を経て、歩太は春妃の肖像画を描くという話であるが、事件を語っている歩太は、死別した女を衣服の絵に収めることが可能なほどに気持ちの整理がついたと言える。

こうした「少年が年上の女に恋をし、やがて女が（妊娠した後）死ぬ」物語には、多様な亜種が存在する。例えば、トマス・マンの晩年の短篇「欺かれた女」では、アメリカ人の青年ケンに恋するロザリーは、初老の夫人である。この小説では、ヒロイ

ンのロザリーエは高齡という設定のため、物語上に妊娠や出産というシークエンスはないが、産褥後に死ぬことの代理であるかのように、ロザリーエは子宮筋腫によって亡くなる。彼女は子宮筋腫による出血を月経が復活した（IIケンとの間に出産が可能な女に戻った）ものと思ひ込んで喜んでいたのに、「欺かれた」のである。この小説の語り手は一人称ではなく三人称の語り手であるが、語り手が「わたしたちの世紀」などと述べていることから、聞き手として同じ世紀を生きる人物が想定されていることがわかる。一人称の語り手が回想する体裁を取ってはいないが、そのためにロザリーエのましく立てるような独白が生きてくるのであり、この点に、他の類似の小説と異質の文学的個性が現れている。

ベルンハルト・シュリンクの小説「朗読者」<sup>(注14)</sup>は、未成年の男と成人の女との年齢差が大きい小説である。一人称の語り手「ぼく」(一五歳のミヒヤエル)が三六歳のハンナに看病をしてもらい、男女の仲へと発展する。やがてハンナは忽然と姿を消す。大學生になったミヒヤエルがナチスの裁判を膨張に行くと、強制収容所の看守をしていたということで、被告席にハンナがいて、彼女は無期懲役の判決を受ける。ミヒヤエルは服役中のハンナに一〇年にわたって「オデュッセイア」(一〇年かけて妻のもとへ帰還するオデュッセウスがミヒヤエルで、夫の帰りを待つ貞操の妻ペネロペがハンナに相当する)の朗読テープ(ジュネット流に言

えば、「オデュッセイア」の朗読テープは「第二次物語言語」である)を送り続ける。四年目に獄中のハンナから手紙(第二の語り手はハンナ)が届き、ふたりは久しぶりに再会する。しかし、出所の準備中に突然ハンナが謎の自殺をしようという話である。語り手のミヒヤエルの年齢は特定できないが、「いままでは三六歳の女性を見ても若いと思う」ほどの月日が流れた現在から過去を回想する形式が採られている。なお、この小説に妊娠の痕跡は見つけ難い。

再び日本文学に目を向ければ、太宰治の「人間失格」<sup>(注15)</sup>なども、美少年が中学時代に年長の人妻と性的関係に陥り、その人妻と心中未遂事件を起こしたことを後年になって暴露する小説である。作中では(現実でも)、心中騒ぎで人妻だけが死ぬが、ここでも回想の叙法を採用する一連の小説と同じ出来事が反復されている。また、一時期ブームとなった片山恭一の「世界の中心で、愛をさけぶ」<sup>(注16)</sup>も同様である。この「セカチュー」は、語り手の朔太郎が一〇年以上前の高校時代の恋愛を回想する小説である。恋愛対象のアキは朔太郎と同級生だが、そのアキは一七歳で白血病により他界する。あるいは、村上春樹の「ノルウェイの森」<sup>(注17)</sup>も、三七歳の「僕」が飛行機の中から一八年前の学生時代を回想する小説である。「僕」の恋愛対象の直子は精神病院に入院し、後に自殺する。同じく村上春樹の処女作「風の歌を聴け」<sup>(注18)</sup>も、二九歳の「僕」が二一歳の学生時代を回想する形式の小説で、「僕」の

恋人が自殺する。その後登場する左手の小指がない彼女は、顔も覚えていない男の子供を妊娠して中絶し、やがて姿を消す。古くは、森鷗外(1871-1942)の「舞姫」も回想の叙法を採っている。太田豊太郎が船の中から五年前のドイツでの出来事を回想する。恋愛対象はドイツ人の舞姫ことエリスだが、彼女は「十六七」歳で、豊太郎の子を身ごもり、やがて発狂する。豊太郎の年齢は定かではないが、この場合はエリスの方が年下である。「セカチュー」や村上春樹の小説では男女は同級生だが、女たちが自身や恋人の死を受け入れている点をみれば、精神年齢は男より女の方が高いと言える。鷗外の「舞姫」におけるエリスの発狂は、実質的には死に近い扱である。

ここまで回想の叙法を採用する代表的な小説を思いつくままにみてきたが、繰り返して確認すれば、男が若き日の恋を回想の形式で語る小説では、主人公の男より恋愛対象の年長の女は先に死ぬ。なおかつ薄幸のうちに死ぬ。しかも、しばしば女性は好きでもない男と結婚し（あるいは結婚後にその恋から冷めて）、望まぬ出産や流産が遠因となって死ぬ。年上の女は、年上であるがゆえに（結婚が可能な年齢であるがゆえに）、妊娠というトピックが付き物となる。そして、その合わせ鏡として、年下の少年の方は、（妊娠に必要な性的能力はあっても）未熟者として描かれ、やがて時を経て成人後に過去を述懐する。シュリンクの「朗読者」では、女は妊娠が難しい年齢に達しているし、「セカチュー」

のヒロインは重病であるから妊娠できない。このような偏差はあるにせよ、年上の女を好きになった男が回想する形式の話は、概ね定型的であり、構造的な反復が認められる（と同時に、構造的な差異もあり、そこに各小説の個性がある）。かつて斎藤美奈子は、（家庭内を除く）妊娠が登場する小説を総称して「妊娠小説」と呼んだが、斎藤美奈子の定義を拡大し、（家庭内も含む）望まない妊娠が登場する小説の一定型として、若い男（少年・青年）が年上の女に恋をする回想形式の小説群があると言っておこう。

### 三

回想の叙法を採用する小説には、おそらく次のことが共通する。それは、過去を回想する現在において、語り手は、過去に起こった出来事を現在においては語るに値すると判断しているということである。それは、（想定される聞き手を前にして）現に語っていることから明らかだ。たとえば、ある事件が起こった過去においては、その事件は語るに値しないと置いていたのが、現在になって、何らかの「相応の理由」によって、過去の事件は語るに足ると語り手に判断された。もしくは、もともと語るに足る内容だったけれども、それを語るには、「相応の理由」によって、語り手には一定の時を経る必要があった。回想の叙法を採用する小説全般に差し当たり言えるのは、「相応の理由」（語り手に課されていた禁止事項の解除が起こったのか、語り手が語るに足るス

テージまで到達したのか、語り手の気持ちや関係や物理的な諸事項の整理・精算がついたのかなど) によって、過去(の事件)を語る現在の語り手は、事件当時の諸関係の中に身を置いていた時よりも、時間を経て事件(及び諸関係)との距離を得ることで、一定の俯瞰的な視座を獲得している(相対化に成功している)ということである。そうでないと、(語り手に対して想定される)「聞き手」にわかるように整合的に説明する「物語ることはできない。なお、回想する現在において、他ならぬ当事者の女が他界しているからこそ(女に気兼ねせず)、語り手は回想を「聞き手」に公表することができる。語る現在において、語り手の回想の公表を拒否(あるいは許可)する主体(プライベートを暴露される女)は既にこの世に存在しないから、過去の事件を聞き手に公表することに關して、語り手は語ることに責任を一手に引き受けている、ということが出来る。例えば「朗読者」の一人称の語り手ミヒヤエルは、小説の末尾で、最初は書こうとしてもなかなか物語が蘇ってこなかったと話し、「なんて悲しい物語なんだろう」と長く思っていたが、物語を完全に整理できた後は、「いまの頃は、これが真実の物語なんだと思い、悲しいか幸福かなんてことにはまったく意味がないと考えている」と述懐するまでに、精神的なステージが変化したと言えよう。

それでは、回想の叙法を用いる語り手に上述のような性質があることを踏まえた上で、漱石の「こゝろ」について考えてみた

い。

漱石は「野菊の墓」を絶賛したが、その漱石の小説では、女はどのように描かれているのか。「野菊の墓」に感激する漱石であるから、それと対称的なツルゲーネフの「初恋」に登場する女王ジナイーダなどは、どちらかと言えば不快な存在とならう。「野菊の墓」と同じ明治三九年に発表された「草枕」の那美や、その二年後に書かれた「三四郎」の美禰子などは、民子かジナイーダかどちらかに分別するとなれば、ジナイーダに近い「新しい女」になるだろう。夫と離婚し、夫に金の無心をされ、満州へ立つ夫と汽車の窓越しに見つめ合う那美は、ジナイーダのように命を落としはしないが、決して幸福とは言えない。美禰子にしても、好き合っていた野々宮と結婚できず、未知の男性に嫁いだのだから、ヴラヂーミルの父と結婚できず、別の男へ嫁いだジナイーダのようではないか。美しいジナイーダの周囲には「崇拜者」が群がり、彼女はヴラヂーミルをはじめとする崇拜者を弄ぶ。ヴラヂーミルにはジナイーダの心中がわからなかったわけだが、漱石の「三四郎」では、三四郎こそが美禰子の「崇拜者」に相当し、ヴラヂーミルのように、三四郎も美禰子の胸中を推し量ることができない。

「初恋」や「野菊の墓」などの回想の叙法を採る小説は、過去の出来事が挟み込まれる入れ子式の構造を持つが、斎藤美奈子は、過去を挟み込んで回想する現在について、それは挟み込まれ

た事件を焦点化するための額縁のようなものだと言い、回想される過去は額縁によって強調される一服の絵のようなものだと述べている。<sup>(註)</sup>斎藤美奈子が言うように、回想の民子や回想のジナイーダが額縁に収まる絵のモデルなのだとすれば、画家に自分の画を描くように求め、最後の汽車の見送りの場面でようやく画家から画になると言われる那美や、画家の原口の肖像画「森の女」のモデルとなり、最後にその画が完成する美禰子は、回想形式の小説で悲劇的なヒロインが文字通り額縁によって強調され、額縁によって収められたと言えよう。要するに、民子のような純真性に感激する漱石が描く小説においては、民子と隔絶する女性は、「草枕」で画家が那美を「憐れ」と評したような物悲しい一服の絵に収められ、あまり幸福な未来は用意されなかったのである。死んだ春妃の肖像画が歩太によって描かれる「天使の卵 エンジェル・ス・エッグ」も、この延長に捉えられよう。

#### 四

「こころ」も、一人称の語り手（元青年）による回想の叙法を採る小説である。「こころ」の冒頭部を確認すると、「私はその人を常に先生と呼んでいた」、「だからここでもただ先生と書くだけ」、「私はその人の記憶を呼び起すことに」、「筆を執っても心持は同じ事」、「その時私はまだ若々しい書生であった」（傍線は全て引用者）などと記されている。傍線部に明らかなように、

「こころ」の叙法

過去の出来事を当時「まだ若々しい書生であった」（ということ）は、今は若々しくない）語り手が、「筆を執って」、過去を回想している。上中下の三部構成で、下の部分が全て先生の遺書に当てられているのでわかりにくいのが、年を経た語り手（元青年）が過去を回想し、その回想の途中に、先生からの「遺書」を聞き手に対して公開していると読める。<sup>(註)</sup>小森陽一はいち早くこの点を押さえ、青年が「自らの手記の中に遺書を引用しよう」としたと主張した。語り手の元青年が回想する現在においては、かつて敬愛した先生は存在しないので、先生はその「遺書」の公開を物理的に拒むことはできない。先生は妻の静が気がかりで、遺書を公開しないように青年に釘を刺していた。しかし、それでも青年は遺書を公開したのだから、先生（と静）との関係や先生への評価などが、時を経た語り手の元青年においては、先生の命令に背くことができる程度に整理・清算されていると考えられる。

小森陽一は先生の死後に青年と静が「共生」する可能性を示唆しているが、「こころ」を「年下の男（少年・青年）が年上の女を好きになり、やがて（その女が他の男との間で妊娠し）、不幸の後に死ぬ」という回想の叙法を採る小説の定型に当てはめれば（「こころ」を若い男と年長の女が恋愛した小説とみれば）、先生の亡き後、青年と静は恋愛関係になったものの、静は妊娠や出産（流産）にまつわる病によって死に瀕するほどに健康を害していると思像することができる。<sup>(註)</sup>静と青年との間に恋愛関係が生じ



たのか、静と青年との間に子がもうけられたのか、無職の青年に生活や人生は託せなかったのか、静は第三者と再婚したのか、第三者との間に子がもうけられたのか、子をもうけようとしたものの流産したのか等々の様々な物語の展開も想像できる。少なくとも、回想の叙法を採る小説の語り手一般に言えることが、「こゝろ」の青年にも当てはまるとすれば、いずれ静と距離を置いた語り手の元青年は、時を経て先生の影響圏から脱し、(ヴラヂーミルが父とジナイーダを相対化できたように)先生と静を相対化できる地点まで到達したことは間違いないまい。

小森陽一は、『こゝろ』には、「私」と「先生」という二人の手記の書き手がいて、「私」(青年)の語りは、「先生」の過去も語りも差異化するが、それは「否定」や批判ではなく、「先生」の行為を反復し、共感する要素を持つ」と言い、先生と青年と読者の自己意識が「多層的円環的に組みあわされる」と述べている<sup>(註)</sup>。しかし、語り手に対応する隠れた登場人物である聞き手に向かって、元青年の語り手が、先生を裏切るかのように、先生が嫌がった遺書の公開に踏み切るのでから、元青年による「先生の過去」の「差異化」が「否定」や批判ではないと言いつけるだろうか。元青年が「先生の行為を反復」しているとすると、なおさら年輪を重ねて培われた冷徹な批評眼(リアルさやクールさ)を研ぎ澄まし、「共感する要素」を凌駕する地平に元青年の語り手は到達していないだろうか。

回想の叙法を採る小説の仲間に「こゝろ」を加えれば、元青年である語り手は、年長の静と添い遂げることができなかった、結婚することができなかった、先生という寄り添った静とどのようなカタチであれ「共生」することができなかった、出産にまつわる病が原因となって静が病辱の身である、「舞姫」のエリスが発狂したような、死にも等しい悲劇が静を襲った等々のあまり明らかな未来が予想される。小森陽一が言う「行為を反復」や「多層的円環的」な組み合わせがあるのだとしても、元青年と静との「共生」の可能性よりも、寧ろかつて青年が危篤の父を見捨てて先生のもとへ駆けつけようとした行為が反復されて元青年が瀕死の静から距離をとり、静の母と元青年の父が同じ病に倒れたことが反復されて静もまた同じ病を患う可能性もあろう。静は策略家だとする説があるが、漱石の他の小説の女(那美、美禰子)や女王ジナイーダの延長に静がいるとしたら、彼女は罰にも等しい厳しい状況に追いやられるはずだ(那美のように愛する夫と引き裂かれる孤独、美禰子のような望まない結婚、ジナイーダのような不倫・懐妊を経ての死)。

回想の叙法を採用する小説の語り手の男たちは、多少の偏差はあるものの、時を経て、物理的にも精神的にも女と距離を置いた地平に立ち、自分と女との間にかつて存在した関係や事件を冷徹に整理・精算している。ならば、「こゝろ」の語り手である元青年も、回想の叙法を採用する他の小説に準じて、(彼に多少の愛

情や憐憫や後悔の念が残っていたとしても）遠くから静についての整理・精算を果たしている可能性がある。回想の叙法を採用する小説の定型に照らせば、小森陽一が想像する静と青年の「共生」という未来はむしろ閉ざされているし、石原千秋が用いる「成長」や「大人」や「覚悟」や「葛藤」や「通過儀礼」などの倫理的な言葉から遥かに遠ざかる地平に元青年の精神はあるのではないか。仮に元青年の私と静との間に一時的な「共生」があったとしても、死の影が纏いつく暗い未来が予想される。

「朗読者」の語り手ミヒヤエルは、自分が語った物語の終わりでも、かつてはそれを「悲しい物語」と思ったが、現在では「これが真実の物語なんだと思い、悲しいか幸福かなんてことにはまったく意味がないと考えて」いて、かつての経験が「現在進行中の」ものとして「後の体験の中に見いだされる」と語った上で、「ぼくはやっぱり、自由になるために物語を書いたのかもしれない」と結論付けるが、このミヒヤエルの先達が「こゝろ」の元青年ではなからうか。元青年が語る「事実の物語」は、「悲しいか幸福か」や大人か子どもかなどといった二項対立的な図式で評価されるものではない。「共生」というリベラルなあり方も倫理的なチームや成長物語という枠組も雲散霧消する、もっと「自由になるため」の現実には、「こゝろ」の語り手は到達しているにちがいない。

「こゝろ」の叙法

注

注1

J・ジュネットは、テキストそれ自体を「物語言説」(poetic)と呼び、テキストから読み取れる物語世界の内容を「物語内容」(Storie)と呼んで、両者を区別している(「物語のティスクール」方法論の試み 叢書記号学の実践2)花輪光・和泉涼一訳 水声社、一九八五年九月)が、このジュネットの区別に本稿は従う。

注2

東京・大阪『朝日新聞』、一九一四年四月二〇日〜八月二一日

注3

『ホトギス』、一九〇六年一月一日

注4

ジュネットは『物語のティスクール』(注1)で、「物語内容の現時点に対して先行する出来事をおとになってから喚起する一切の語りの操作」を「後説法」(analepsis)と名付け、「人称」は不適切な言い方だとして使用せず、語りを「態」のレベルで抽象化して分析している。ジュネット流に言えば、「回想」は錯時法としては後説法に含まれるが、本稿の目的は物語論の理論的研究ではないので、高度に抽象化されたジュネットの概念(「後説法」や「態」)は避け、具体的な小説を分析する際に便宜的・慣用的で運用しやすい「回想」や「人称」といった概念を用いる。

注5

永塚功「『野菊の墓』成立に関する比較文学試論―嵯峨の屋御室「初恋」を媒介としたロシア文学への志向」(『語文』、一九八六年六月)

- 注6 『読書文庫』、一八六〇年
- 注7 ジュネットは『物語のティスクール』（注1）で、手記や書簡などの挿入によって齎される物語言語を第二次物語言語と呼ぶ。「初恋」で言えば、語りの現在が第一次物語言語であり、回想される手帳の記述が第二次物語言語である。なお、第二の語り手は第二次物語言語に対応する。
- 注8 『都の花』、一八八九年一月
- 注9 注5に同じ
- 注10 『名作後ろ読み』、中央公論新社、二〇一三年一月
- 注11 ベルナル・グラッセ、一九三三年三月
- 注12 集英社、一九九四年一月。映画（製作は松竹他、配給は松竹、監督は富樫森、出演は市原隼人、小西真奈美、沢尻エリカ他）の公開は二〇〇六年一〇月二日
- 注13 Merkur 一九五三年九月
- 注14 Diogenes Verlag 一九九五年。題名は語り（朗読）の重要性を示唆するものだが、語り手は、「オデュッセイア」をテープに録る「朗読者」（第二の語り手）であると同時に、一人称の語り手が過去を回想して語る「朗読者」（第一の語り手）でもある。二〇〇八年に「愛を読むひと」と題して映画化され、ヒロイン役のケイト・ウィンスレットがアデミー主演女優賞を受賞。
- 注15 『展望』、一九四八年六月〜八月
- 注16 小学館、二〇〇一年四月。「野菊の墓」を「元祖セカチュー」だと述べる論文もある（高橋与四男「純愛物語論―伊藤左千夫『野菊の墓』を中心に―」、『東海大学紀要海洋学部』、二〇〇六年三月）。
- 注17 講談社、一九八七年九月
- 注18 『群像』、一九七九年六月
- 注19 『国民之友』、一八九〇年一月
- 注20 『妊娠小説』、筑摩書房、一九九四年六月
- 注21 『明治三十八年一二月二九日付夏目漱石書簡』（『漱石全集』第二二巻、岩波書店、一九九六年三月）
- 注22 『新小説』、一九〇六年九月
- 注23 東京・大阪『朝日新聞』、一九〇八年九月一日〜二月二九日
- 注24 美禰子と野々宮の結婚進行説は、酒井英行「広田先生の夢―『三四郎』から『それから』へ―」（『文藝と批評』、一九七八年七月）や重松泰雄「評釈・『三四郎』」（『国文学』、一九七八年五月）などの論文が嚆矢で、助川徳是は「野々宮と美禰子は結婚を目指して交際の歴史を織る」（『解釈と鑑賞』、一九七八年一月）と簡潔に記している。美禰子と野々宮の結婚進行説の進捗と現在の趨勢については、石原千秋が『漱石はどう読まれてきたか』（新曜社、二〇一〇年五月）でまとめて説明している。
- 注25 注10に同じ
- 注26 冒頭の「これは世間に憚かる遠慮というよりも」（上二）という一節からも、語り手の元青年による（先生の遺書を含む）手記の公開は明らかと思われる。なお、ジュネット流に言えば、「下 先生と遺書」が第二次物語言語であり、遺書の書き手である先生は第二の語り手である。
- 注27 「こころ」を生成する心臓（『成城国文学』、一九八五年三月）

注28 注27に同じ

注29 「奥さんは今でもそれを知らずにいる」(上二二)とあることから、語りの現在において静は生存している可能性が高い。

注30 注27に同じ

注31 脳溢血で瀕死の父や大人になってから会おうと思えば会えるのに距離を置いていたジナイダのことを淡々と語る「初恋」の語り手ヴラデーミルは、「こころ」の語り手である元青年の先行者に見える。

注32 押野武志「静」に声はあるのか―『こころ』における抑圧の構造―(『文学』、一九九二年一〇月)

注33 『大人になれなかった先生』(みすず書房、二〇〇五年七月)。なお、石原千秋は『漱石はどう読まれてきたか』(注24)で、自身の四本の「こころ」論、「眼差しとしての他者―『こころ』論―」、「こころ」のオイディプス 反転する語り」(『成城国文学』、一九八五年三月)、「高等教育の中の男たち」(『こころ』)、『日本文学』、一九九二年一月)、「テキストはまちがわれない」(『漱石研究』、一九九六年五月)について、「すべてを高校生でも読めるようにやさしく書き直した」ものが『大人になれなかった先生』だと述べている。